

「葦」第46号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院

病院長 古家 仁

附属病院看護部における看護研究誌「葦」第46号が発刊される運びとなりました。発刊に当たり一言述べたいと思います。

忙しい日々の臨床の中で看護研究をし、その結果をまとめ、発表し、そして論文に残す、この一連の作業は重要ですが多くの労力を必要とします。こんなにしんどいのに、こんなに苦労しているのに、と思うこともあるでしょう。しかし結果を残し、そして多くの人に知ってもらうことで人の役に立つ、これが科学の意義だと思います。そのためには研究するだけでなく結果を文章に残すことが重要です。

その点を考えてみます。わたくしは麻酔が専門です。麻酔の歴史の中で、我が国で最も重要な一つの出来事が華岡青洲の業績です。華岡青洲が世界で初めて全身麻酔を実施したということは世界的にも認められています。これは華岡青洲の業績が文書として、しかも物語ではなく科学的に認められる形で残されていたからです。華岡青洲が行った全身麻酔は通仙散という漢方薬を投与することで実現されました。その成分は現在の麻酔で言う鎮静薬と鎮痛薬の組み合わせでした。現在ではその成分が明確になっています。曼陀羅華（朝鮮朝顔）という植物というか生薬から抽出されるベラドンナアルカロイドと草烏頭（トリカブト）という植物から抽出されるアコニチンが中心でした。この二種類の生薬に加えて数種類の生薬が合わさって通仙散が合成され、それを投与することで全身麻酔が可能となりました。そして華岡青洲が後世に認められた大きな因子としてこの通仙散を過去の文献から検索し、調合を重ねて動物実験を行い、さらに同意を得たボランティアで検証をしたうえで患者に使ったという点です。それこそ現在の新薬が患者に使われる経緯を踏んでおり、それを文献として残していたから認められました。たとえば通仙散の処方の原型は、漢の医師華陀が曼陀羅華を基本とした麻沸散という漢方薬を使って全身麻酔をしたという物語が残っていますがやはり科学的な内容ではないということで華陀が世界で初めて全身麻酔をしたということにはなっていません。華岡青洲はその物語を信じてその中の成分を試行錯誤し

て人に使える形にしました。医学の世界ではなくて考古学の世界で物語から実在が発見されることがある点に通じると思います。疑問に思ったこと、やってみたいことを過去の論文を調べそして疑問が解決できなければそれを解決するために臨床研究を行うことも重要です。ただ、臨床研究は多くの必要な過程を踏んで進めなければなりません。単に何も考えずに患者さんを対象に研究を行ってもよいという時代ではなくなっています。そして研究デザインに問題がなければ研究を開始し、結果を出し、発表し、論文にする。この過程が重要です。

科学の世界で残る業績はまず文書であること、そして内容が科学的に誰もが納得できるものであることが必要です。是非質の高い研究をし論文を残して欲しいと思います。